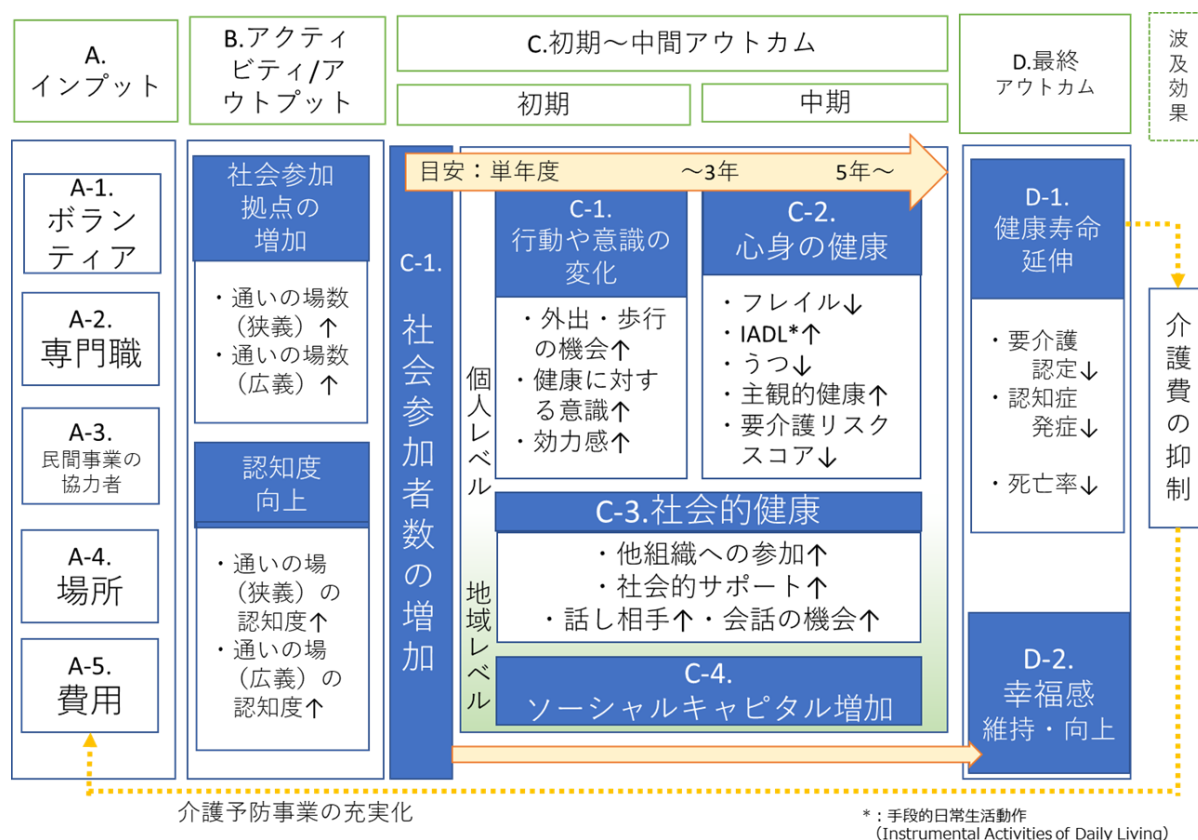


介護予防事業の効果評価を実施するには？

～JAGES通いの場ワーキンググループで整理したロジックモデルの一例～

2015年以降、高齢者の介護予防施策は、地域に住むすべての高齢者を対象とし、通いの場を中心とした地域づくりを進めるポピュレーション戦略が主体となりました。現在、ほぼすべての市町村で実施されている通いの場は普及と同時に、PDCAサイクルに沿った進捗管理や効果評価が求められています。そこで、JAGESで伴走支援を実施してきた市町村担当者の方の声やこれまで蓄積した通いの場をはじめとする介護予防に関する知見を元に、通いの場をはじめとした介護予防事業の進捗管理や効果評価を考えるために必要なロジックモデルを、通いの場に関心のある研究者が集まるワーキンググループで整理しました。このロジックモデルでは、通いの場などの介護予防事業の実施(A. インプット)から介護予防事業の成果(D. 最終アウトカム)に至るまでのプロセスとして、B. アクティビティ・アウトプット、C. 初期～中間アウトカムを時系列に沿って整理しました。担当者の方が介護予防事業の効果評価に取り組む際に、関係者でこのロジックモデルをたたき台とすることで、初期・中期と比較的短期間の評価において、評価すべき項目が明確となり、進捗管理が行いやすくなることを期待しています。

お問合せ先： 千葉大学予防医学センター 特任助教 井手一茂 ide.k@chiba-u.jp



図：介護予防事業効果評価のロジックモデル(一例)

■背景

2015年以降、高齢者の介護予防施策は、地域に住むすべての高齢者を対象とし、通いの場を中心とした地域づくりを進めるポピュレーション戦略が主体となりました。現在、ほぼすべての市町村で実施されている通いの場は普及と同時に、PDCAサイクルに沿った進捗管理や効果評価が求められています。そこで、通いの場をはじめとした介護予防事業の進捗管理や効果評価を考えるために必要なロジックモデルを整理することとしました。

■対象と方法

日本老年学的評価研究(Japan Gerontological Evaluation Study: JAGES)における通いの場に関する21件の論文やJAGESで伴走支援を実施してきた市町村担当者の方の声を元に、通いの場に関心のある研究者が集まるワーキンググループで、通いの場をはじめとした介護予防事業の進捗管理や効果評価を考えるために、必要なロジックモデルを整理しました。

■結果

通いの場をはじめとする介護予防事業効果評価のロジックモデルを作成しました。このロジックモデルでは、通いの場などの介護予防事業の実施(A. インプット)から介護予防事業の成果(D. 最終アウトカム)に至るまでのプロセスとして、B. アクティビティ・アウトプット、C. 初期～中間アウトカムを時系列に沿って整理しました。通いの場などの介護予防事業の実施により、社会参加拠点や認知度が向上し(B. アクティビティ・アウトプット)、通いの場を含むC-1. 社会参加が増え、参加をきっかけに個人レベルではC-1. 行動・意識、C-2. 心身の健康やC-3. 社会的健康など、地域レベルではC-4. ソーシャルキャピタルなどの初期・中間アウトカムが変わり、健康寿命延伸や幸福感向上(D. 最終アウトカム)に至る理論(ロジック)を示しています。

■結論・本研究の意義

通いの場をはじめとする介護予防事業は、PDCAサイクルに沿った進捗管理や効果評価が求められています。通いの場の進捗管理や効果評価を行う際に、関係者でこのロジックモデルをたたき台に議論をすることで、初期・中期と比較的短期間の評価において、評価すべき項目が明確となり、進捗管理が行いやすくなることを期待しています。

■発表論文

井手一茂, 近藤克則. 介護予防の効果-医療経済的な立場から-. 老年社会科学 44(4), 392-398, 2023.

■謝辞

本研究は独立行政法人日本学術振興会、厚生労働省、国立研究開発法人日本医療研究開発機構、国立研究開発法人科学技術振興機構などから研究費の助成を受けて行われました。また、介護予防事業評価のためのロジックモデルは横山由香里先生(日本福祉大学)をはじめ、JAGES通いの場ワーキングの先生の助言を頂き、整理したものである。記して深謝します。